

無刀流開祖 山岡鉄舟居士の剣道理念と真髓

上山智身

序

剣は剣 禅は禅で、表われた形は違います、然しその本体においては剣禅一如であります。山岡鉄舟は〔余の剣法や、ひたすらその技をこれ重んずるに非ざるなり、その心理の極致に悟入せんことを欲するものにあるのみ。換言すれば、天道の発源を極め、併せて其の用法を弁せんことを願うにあり。猶切言すれば見性悟道なるのみ〕と剣禅一如の実境涯に体達し、かく申されております。

日本剣道の沿革を簡単に申せば、古い歴史を持つ剣道の源は武術であり、武術は素面素籠手の真剣勝負、命のやり取りであり、この中には人間の根本的なものが入っている。何と云っても吾々は生きなければならない。武術は“絶対生の肯定”であります。

戦国時代末期になって、武術を更に掘り下げて研究して参りますと、生きるところの根源に行きつき、それに影響を与えたのが佛教・儒教・道教・日本の惟神の道であります。例をあげますと、柳生流極意は、沢庵禅師からの「不動智神妙録」これは300年前のものであり、一刀流は、鐘巻自齊より伊藤一刀齊に伝えられた「一刀流こうじょう高上ごてん極意五点」、これらはいずれも禅が根底となっております。でありますから剣術も次第に昇華して剣道になった。ここが日本武道の真実の所であります。

柳生流、一刀流ばかりでなく、宮本武蔵は春山和尚について二天一流を、針ヶ谷夕雲は虎伯和尚に参じて相ぬけかた剣法を、寺田五郎衛門は東嶺和尚の印可を得て天真一刀流を發明しております。皆、剣禅一如の剣道であります。

それが徳川時代中期頃までは形かたとして伝わり、この形の中には武道の真髓があります。ところが形は、木剣又は真剣を用いますから実際に相手を切る所までやらないで止めなければならない。その点が技として不十分なので、徳川中期に、実際に打つところまでやらせようということで、形の補助として今の竹刀の稽古を始めた。その当時は形が相当に出来ないと言われ竹刀稽古はやらせなかった。形が本体で、竹刀稽古は形の補助なのであります。

ところが実際になると竹刀稽古の方が面白い。これが流行するとただ当てることを研究するようになる。これは本末転倒であります。天保時代に大石進おおいしという人が出まして、この人は皆が当てっこをやっているから、当てっこを工夫すること二年間、自分の身長位の長い竹刀で毬を

突いて片手突きを研究した。これで試合をして誰にも負けなかった。

もうこうなると墮落です。剣道とは申せません。大石進は江戸に出て来て千葉周作と試合をした。千葉周作はそれに対するに四斗樽の蓋を取って鏢にした。そうなったらもう無茶苦茶で、山岡鉄舟は“あれは戯技であり剣術にあらず”と言っておられます。これが禍となって、その禍が今日まで及んでいる。大石進が当てっこのスポーツ剣道の元祖で、これは剣禅一如の人間形成の道とは無関係であります。そこで日本古来の正しい剣道に返すべく、昭和50年に全日本剣道連盟の総力で剣道の指導理念を作られた。剣道は試合が目的ではない、又、段が目的でもない。段よりも実力、実力よりも真実、至誠の方が上である。こう言う見地から〔剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である〕という剣道の理念が作られたのであります。

一刀流に伊藤一刀齋が鐘巻自齋から許された「高上極意五点」があり、山岡鉄舟には、「洞山五位」の公案を透過して、無力流五点を作られた。ですから無刀流の「五位点」は五位の公案を透過しない者には真意は分らないのでありますが、無刀流開祖山岡鉄舟の剣道書を通して、剣理とその真髓に觸れて見度い。

(一) 無刀流開祖 山岡鉄舟先生剣道書

無刀流と称するの説

剣法者鍛錬刻苦して無敵に至りたるを以て至極とす、優劣あるときは無敵にあらず、是皆心のなす處にて優者に向ときは心止り、太刀控へて運ばず心に敵を求め自から心を止め太刀控へて運ばざるなり、劣者に向ときは心伸び太刀自在をなす 心に自在と想ふところよりなるものなり、是れ心外に一切ものなき証據なり、修行者数十年苦行をなし唯身体の働と太刀の運び計をみるは非也 予が發明する處の無刀流と称するは心外に刀なきを無刀と云。無刀とは無心と云が如し無心とは心をとどめずと云事なり 心をとどめれば敵あり 心をとどめざれば敵なし所謂、孟軻子の浩然の気は天地の間に寒と云は則、無敵の至極なり昼夜工夫をを凝し怠らざるときは一旦豁然として無敵の地を發明せん必疑を容れず刻苦修行あるべし

剣術の流名を無刀流と称する譯書

無刀とは心の外に刀なしと云事にして三界唯一心也 一心は内外本来無一物なるが故に敵に對ふ時、前に敵なく後に我なくして妙応無方朕跡を留めず、是余が無刀流と称するわけなり

過現末の三際より一切萬物に至る迄何ひとつとして心にあらざるものはなし、其心は、もとあとかたも無き物にして活潑無盡蔵なり、其用や東涌西没南涌北没神變自在天も測る事なし、此處を能々自得する時は倚天長劍逼人寒敵に對して敵あらばこそ金翅鳥王の宇宙に當るが如し、其妙応なるや愈出て愈奇、青は藍より出て藍よりも青し、又其日用事々物々上に於けるも亦然り、神變自在にして無盡蔵、物に滞らず坐せんと要せば便ち坐し行んと要せば便ち行く、語黙動靜一に

真源ならざるはなし、心刀の利用亦快ならずや

入門規則

無刀流剣法者事理一致を修行するにあり

蓋古来より諸流の始祖刻苦精練し各自發明する所ありて竟に其流名立しものなり、然るに目今末流の弊、其法を守るもの絶てなく一般に長竹刀を以て勝負のみを争ふに至る、是無他剣法の真理を知る者なく只末技に走り虚飾に流れて外見を主とするに由てなり、是を以て実地真剣の勝負に及んでは假令勝を得るあるも一時の僥倖にして明白の勝にあらず、予が見る處是に異り外見体裁に不拘真理自然の勝を治めて無形の地を占るものなり、故に此道を修せんと欲せば初心の者予が門に入り勇悍不退の志を勵まし苦修鍛錬する時は三年にして流義の体を備へん其体を備へざるに即今流行の演武場に行て猥に試合するを禁ず、何んとなれば將に其体を備へんとせしを破ればなり、抑無刀流は予が發明する所にして事理一致の秘訣なり其教に至りては古傳を以てす、入門の士此規則を遵守す可し

・無刀流兵法

・正五点（點）

(1) 妙 劍

(1) 絶 妙 劍

(1) 真 劍

(1) 金翅鳥王劍

(1) 獨 妙 劍

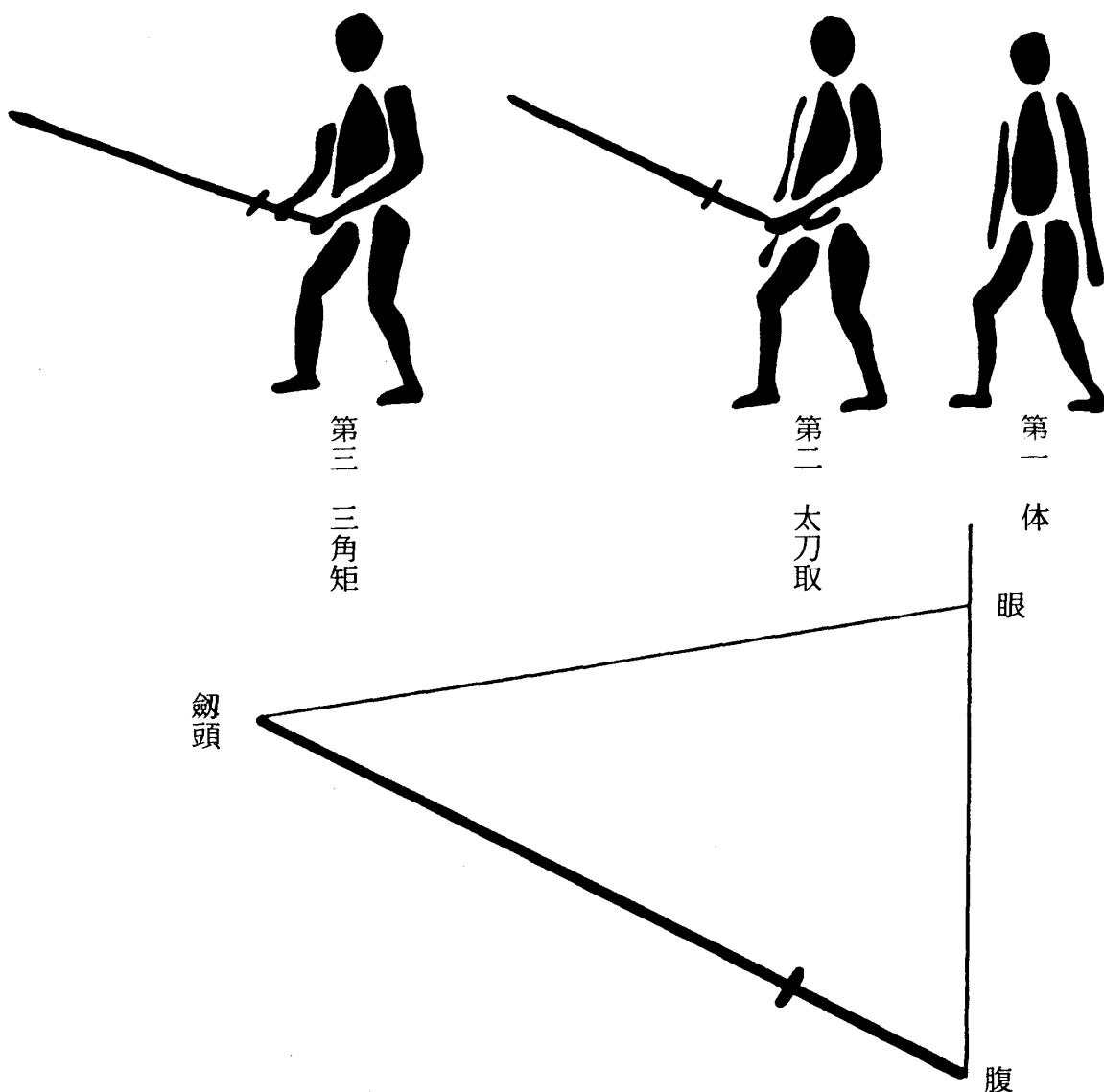
口 譯

1、其吾剣術は人我剣撃の勝負を争はず只、鍊心鍛術自然の勝を取るを要する耳、而して其妙術に至るとき刀を振て心外に刀なし敵に対して目前に敵なし縦横無盡心を以て心を撃、是之を電光影裏斬春風と云なり

1、撃剣の方術は事理の二つを鍊磨するに在り、事は技なり理は心なり、而して鍊磨の功つむときは事理一致の妙處に至る猶又鍊磨究盡して事理共に相忘ずる時、一劍倚天寒し、妙是妙術の奥義を得るは自ら鍊り自ら鍛ひ刻苦工夫心身心身打失にして年月を経る時自然に其の甚深の妙理に投着す。譬ば水を吞んで冷暖自知するが如し、是れ之を以心傳心無刀流の剣術と云也。

劔法三角矩

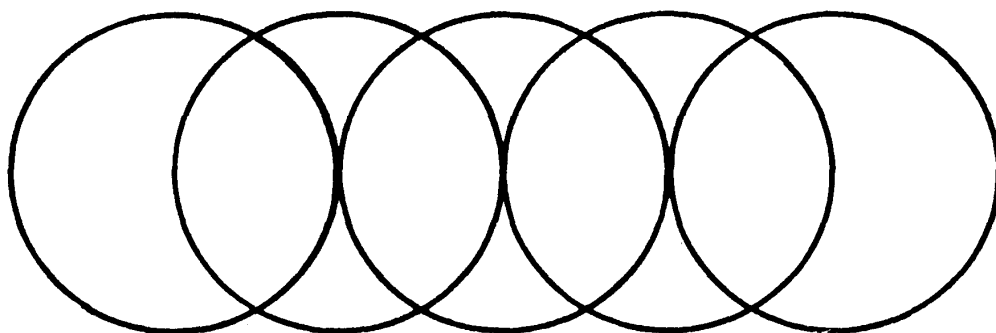
三角矩は眼腹劔頭此矩にはずれぬ様修行あるべし



太刀の寸法は自身の手を以て十束を定寸とす。

- 十束は自身の半なり、三角短は眼、腹、劔頭の三つを一つとなし敵に立向ふなり。太刀の寸は我左右の手を延したる処の全体の半なるが故に十束の劔を持ち立つとき全身延びて敵に向ふ訳なり是を古来より天真正傳と云ふ。 則三角矩天真正傳にかなへり

天真正傳



当流の門に入り剣道を学ばんとせば先此三角矩を初学第一の根元とす、夫れ万物は体あって後用あり体無ければ用をなすことなし、剣法も之に同じ体成なれば用自ら成るの道理を知り三角矩を堅く守り修行あるべし然るときは実に体用不二の奥義を得るに至る必然なり

勉旃 勉旃

明治十六年三月三十日

無 刀 流 開 祖 山 岡 鐵 太 郎 印

初 学 の 心 得

剣道を学ぶには初年の間は善悪勝負に不拘、身体偏曲なく我が身体手足心の及ぶ丈は骨を折、打込々々無滞烈しく細き處まで延て自然に出、業の口なる事を専一とし然る時は強に付、こりなく屈伸自在になり敵の打出す可き太刀も見え己が打込場も知れ受留も出来る也 仍て心気に邪思の疑ひなく業に偏曲なく凝なく修行肝要也

素面木刀試合之説

剣術修行の中古に於ける諸流皆素面木刀に非ざるは莫し而して今を距る百有余年諸流始めて面或は半首小手胴を用ひたり是れ其の然所以のものは他なし体を練り業を厲くして十分に撃刺する利あればなり。素面木刀試合の如きは此に異り妄りに進めば我体を傷のみならず敵の刀勢人体に触れんと欲すれば誰か之に通ぜざらん極めて進退を能くし以て弱中に強あり強中に弱あるの理を解すべし、然らざれば試合をなすこと難し、中古諸流の士他流試合をなすに多くは真剣刃引又は木刀を用ひ立處に打斃し切殺すもの数ふるに違まあらず何となれば師に従い術を学ぶものをして負傷者となさしむるは師たる者の甚だ恥る所にして必ずしも取らざるなり、然れども此道は無形を要し変化自在を学ぶものなれば其変化する所に依て太刀の当らざると限りたるものにあらず夫れ優者劣者を助くるは天の道にして固より疑を容れざるなり何ぞ即今用ふる所の面、小手試合の如き勝負をのみ争はんや、優勝劣敗は勿論にして其高妙に達する者危殆なきは判然たり。しかれども素面木刀の試合をなすに修行者必心得無んばあるべからざるの一事あり、慎て之を守らざれば危きことなり面小手試合にても数年修行をなせし人は敵の気合を知る血気修行者腕力拍子のみにて勝負を争い猥りに敵に向い面小手試合の如くするときは必ず傷を被ふるの憂い無きなり、素面木刀を以て試合をなし打斃し又は傷を負はするが如きは剣法の真理を修行する者にはあらざるなり

剣道悟入覚書

学て不成の理なし、不成は自ら不為なり、予九歳にして剣に志し真影流久須美自適齋に従いて学ぶ、其後北辰一刀流井上清虎の門に入り此道を修行し諸流の壮士と試合すること其数千万のみならず其中間刻苦精苦する凡二十年然れども一の安心の地位に至るを得ず、於是銳意進取して剣道明眼の人を四方に索むるに未だ嘗て其人に遭はず偶々一刀流浅利又七郎と云う者あり中西忠太の二男にして伊藤一刀齋の伝統を継ぎ上達の人と云う、予之を喜び行て試合を乞う。果して世上流行する所の剣術と大に異り、外柔にして内剛也。精神を呼吸に凝し勝機を未撃に知る、真に明人の達眼と云べし、是より試合する毎に遠く及ばざるを知る（浅利氏は明治某年収術後、剣を不取）爾来修行不怠と雖も浅利に可勝の方なし、故に日々剣を取て諸人と試合の後獨り浅利に対する想をなせば浅利忽ち剣の前に現れ山に対するが如し、常に不可当となす、予時明治十三年三月三十日早天寝處に於て縦前の如く浅利に対し剣を揮うの趣を成すと雖も剣前更に浅利の幻身を見ず於是乎真に無敵の極處を得たり、乃ち浅利を招て我術の試験を受く、浅利曰く、大に妙理を得たりと遂に我術を開て無刀流と號すと云鳴呼諸道の修行も亦如斯耶、古人云、業は勤むるに精しと勤むれば必ず至其極諸学の人請勿怠

同

余九歳より剣法を好み修行せり幻年の頃者只敵を打んとのみ思い前後左右にかかわらず必死となりて打込みしが十ヶ年余も不怠修行せしに追々剣を遣うの道も卒に進退自由に働き敵に向えば必ず勝つ事とのみ思いしが廿歳の頃より少しく敵の太刀尖等にかかわり自由の働きも難成兎角敵に打たれ思ふ處になり難く如何せば縦前の如き進退自由にあらんかと苦心せしに追々思ふ儘に成り兼ね扱ては此修行もとても成就することかなはじと思ひしが是迄の修行も不成は遺憾なりと猶心を励まし修行せしにより、又少しく力を得たる心地して廿八九歳の頃は昼夜工夫を凝し業の早き處になく落付きたる處にて試合をなすに自ら力を得し思いせり、其時は敵の上手下手を見る太刀を構えたる計にて明瞭なり、数年修行せし効としては別になく此敵の巧拙を知るを所得としをれり、然れども是にて足れりとなせば何の奇特かある一度此道を極めんと心に決せしより、たとえ世間に剣道を廃止し一人の相手なきも余は誓って極處に徹せずんば止まずと心を奮起し、年々修行不怠明治十三年三月三十日頃に無敵の境に到着す其歡喜言語の及ぶ處にあらす古来の心傳親切丁寧毫も疑う處なし時四十五年なり夫れより縦前の上手下手戦はざる前に知るを考うれば全く敵に上手下手あるにあらず、自己の上手下手をつくること確然たり自己なければ敵なし此理を真に悟れば上手下手、強弱、大人小兒の別は唯の一点もなし是即好雪片々不落別處と云妙處也

(二) 剣道と、その目的

精神面に重点を置いて、剣なんぞどっちがどうでも宜しいのだと云う人もたまにはおりますが、そうではない。「剣を離れて剣道はない。剣があるから剣道なので、剣の一字が大切なので、それからただ「剣」だけですと、撃剣もあり、剣術もあり、いろんなものがあります。然し我々の先祖が真剣勝負から、総てのこゝろを経て最後には「道」という處まで昇華させた。この「道」を離れたならば、剣道は非常に浅いものとなる。今から三・四百年も前、切り合いで腕の効く時代ならそれも結構でありますけれども、今、この科学兵器の発達した時代に、斬り方が上手なの、腕が強いのだといつても知れたものです。その剣を通して学んだ道、つまり心です。ただ打ち方が上手とかそういうことでなくて「道」ということ。でありますから剣道で二つの大事なこと「剣」ということと、「道」ということ、この二つを見詰めて参りますと、指導理念はこの二つに収めてしまう。

鐵舟翁は剣道の目的について、次のように述べている。

故に余の剣法を学ぶは、偏に心胆鍊磨の術を積み、心を明め以て己れまた天地と同根一体の理、果して釈然たるの境に到達せんとするにあるのみ。

つまり、自分の本心を明らかに、天地と同根一体の理をハッキリと体得するために、剣を学ぶのだというのである。

わずか二十三歳の若年の頃にかく発心し、後年（明治十三年、鐵舟居士四十五歳）無想の場を大悟して無刀流を開かれたときの手記には、「余の剣法や、只管その技をこれ重んずるにあらざるなり、その心理の極致に悟入せんと欲するにあるのみ。換言すれば天道の発源を極め、併せてその用法を弁ぜんことを願うにあり、なお切言すれば、見性悟道なるのみ」と、ハッキリ断定している。

鐵舟翁が人の問に答えて、剣の極意を「施無畏」と答えている。無畏すなわち不安や恐怖から人を解放し、絶対の安心感を与える施無畏の剣に至って、無刀の道は極まれりというべきか。

(三) 剣の本体

本体というものは目に見えない。剣道ではこれを「氣」。正確には「浩然の氣」という。山岡鐵舟居士は、無刀流の極意は「孟子」の「浩然の氣」であると云い切っています。修行しないと「浩然の氣」は分らないかと思うと、そうではなく、誰でもが生れながらに持っているもので、外に探し求めるのではなく自分で持っていることを肯定すればよいわけで、ところが人間が物ごころがついてくると、競争心だ、何だかんだと余計なものが生じて、それに雲を被せてしまう。そうすると、それが働かなくなる。雲さえかけなければいいわけです。雲がかかってもお月様も

富士山もある。問題はここで、ここを取り違えて剣道を哲学的に考えても分らない。剣道の本体は難しいといったら、こんなに難しいことはない。哲学的に頭で考えても、難行苦行も駄目、易しいといったら易しい。自分はここに生きているという事実を肯定すればいい。これが「浩然の気」。外に探ねたら難しい。哲学的に、或いは難行苦行などに探ねたら難しくなる。

例として一刀流の二代目、小野次郎右衛門忠明が秀忠將軍の命で、膝クリゲに盗賊が数名いるから捕えて来いと。一刀流の名人ですから泥棒の五人や六人は簡単に捕えるつもりで行ったら、向うはもう捕まれば自分達の命はないということを知っているから命懸けになる、命懸けになるから、詰らない欲は取れてしまう。人間本来の本当の気迫が出る。それで小野忠明先生、盗賊に挺摺った。それで、死力を尽してようやく捕えた。一刀流の極意に「獅子老蟻を見て、牙を嚙む」という教えが目録にある。獅子というのは百獣の王で一番強い、蟻というものは弱い、然も老蟻で一番弱い。その一番弱いものに対する時に、先ず身構えて全力でぶつかって懸る。これが一刀流の教えになっている。ということは、人間は真剣になれば互格であるということ、ここを真剣に腹に入れて体得することである。

(四) 三角矩の構

剣の修行でどこが大事か、山岡鉄舟居士の教えは三角矩が基本であり、極意の入口です。眼・丹田・剣尖の三点を一致させる、これを剣道の三角矩という。道を歩くにもその方向に向うが如く、剣道では三角矩がその方向に向うところです。三角矩は本体で、木でいえば根にあたる、それではそんなに難かしいものかといえ、それ程難かしいものではない。何故かといえ、誰でも眼はある、丹田（ヘソから下に指三本横にした位のところ）はある、あと竹刀を持てば剣尖はある。その三点が一致すればよい。

難かしいと云えば、その三点を一致させるところが難かしい。もっと云えば三角形の基は竹刀を左手に持って構えさえすればよいのだから不動の姿勢です。これが一寸見ると出来そうであるが出来ない。自分の眼と丹田を一致する、言い換えれば心と体と一致する、気合だ気合だと言っても心と体が一致しなくては気合が出るものではない。

日々の生活で充実した生活と、いい加減にやっているのとでは格段の差がある、充実している時は何かの機会に眼と腹がここだなとハッと気付くことがある。

これを言葉を換えていえば自分で自分を擱んだということになる、自分に気がついたということになる、眼と腹が一致する。これが基である。

自分に気がつくとは

香巖智閑禪師が修行時代、瀧山禪師のもとを離れて、南陽の草深い庵で修行をはじめました。ある時、香巖は、いつものように庭掃除をしていた。すると、箒で掃いた瓦のかけらがそばの竹

林の竹にあたって、カッチンと音をきいて生き生きした本当の自己を掴んだ禅僧もいる。一番肝心なことは充実した日常生活を送ることで、眼と腹の一致しない人は頭脳明晰と言われる人でも、クシャクシャ考えれば考える程解らなくなる。このことを夏目漱石は著書「門」に書いている。

又、考えないで行動（実行）ばかりしている人は独断に陥る。眼と腹の一致、即ち心身が一致、統一できるとそこに自己の主体性が出来て周囲が見えるようになってくる。理屈ではなく「行」が要る。

孔子さまが、我嘗つて終日食わず、終夜寝ねず以って思う

“益なし、学ぶに如かず”と、学ぶとは道にしたがい、法によってその事を習ってゆく行である。剣道は剣という行を通して自分を掴める。僅かの機会に掴める、打たれた時にあゝここだなという風に掴める。鉄舟居士は、どうしても剣の極意が解らなかつたら打たせて見ろと云われる。自己を掴めることを第一として、その上に技術を学ぶ。

昔の剣道の先生は先ず基本をしっかり叩き込む。今の剣道は、小学生の時から仕合稽古のずるかしてい事ばかりやっている。勝った負けたばかりやっているものだから、それが剣道だという風に頭に染み込んでいるから、一生涯勝った負けたの勝負の世界を超越できない。剣道は勝ち負けではない。それでは修羅道である。

鉄舟翁は、剣は無敵に至るを以て至極となすと申されています。相手があるから勝った負けたがあるので無敵となる、これが剣道である、と。三角矩の構えに相手が無い、無敵です。子供の時分から勝った負けた、優勝旗をもらった等と人間が浮かされてしまって、いい加減な剣道をやって一生を台なしにしてしまう。無敵の至るのを以て極意となす、という無刀流の極意の基となるのが三角矩なのであります。

（五）剣の理法

1. 刀法

剣の理法、理法というのは、普通「理合」で宜しいのですが「理合」では範囲が狭うというので「理法」という言葉を使ったのです。この理法の根元は「自然」ということで、人間の造ったものではない。日本の剣道もそれぞれまとまった流派ができて、非常に奥が深く剣だけでなく、自分の心を極めるために、当時の学問の儒教や、禅を学んで深くなった。

宮本武蔵の二刀流も、その根元は自然の理法から出ているものである。極意に「春風桃花花開日、秋露梧桐葉落時」この句は唐詩選にある。

春になると自然に花が開き、秋になると自然に葉が落ちる。これは自然の理で、人間がいてもいなくても春になれば花が咲き、秋になれば葉が落ちる。自然の理法は変えることはできない。たまには変化があった方が面白いから、今年は太陽を西から昇らせようとして駄目、水の

流れを底きより高きに流れさせようとしても駄目、真理は多数決できまらない。人間が造ったものは時代が変れば憲法でも変えられる。国家、社会がよくなり我々がよりよく生きるためなら変えたらよい。然し、自然は変えられない。剣道の理法は一つのものでありますが、説明の手段として仮りに三つに分けてみますと、「剣」即ち「刀法」その刀を持っているものは自分の体、身体であるから「身法」。行動するその元となるものは「心」であるから「心法」。この三つは別々のものでなく一つである。

「刀法」を無視して、出たら目に振り廻す、それは剣道に入らない。剣道というからには「刀法」に適っていなければならない。刀の持ち方にしても、正確にやるためには、「形」から入った方が早道である。「形」をやると「刀法」が身につく。今は日本剣道形を試験の時やって、普段は余りやらない傾向にあります、そうではなく刀法を修行してゆく方が早道なのです。ことに古流の形の中には、先人が命を懸けて体得した「宝珠」が入っている。それでやればやる程、剣道が進めば進む程、味わいが分ってきますから、刀法にはこの形から入るべきである。

2. 心 法

刀法は形に見えますが「心法」は目に見えないだけに面倒である。一刀流に「五点」というのがあります。これは鍾巻自齊が伊藤一刀齋に伝えたという。一刀流の元が僧、慈音ですから「五点」は慈音からきたのではないかと思われる。仏教に「五位」というのがあって、人間の心を五段階に分けてある。この原理を剣道に取り入れたものと思われる。それで僧、慈音から鍾巻自齊に伝え、それを伊藤一刀齋が伝えている。今、北辰一刀流とか一刀流でやっている「五十本」は、一刀齋が真剣勝負で勝った刀であって造ったものでない。「五点」は心の段階を作ったのですから、それによって「心法」を修行する。

山岡鉄舟居士は無刀流にも、最後にこの「五点」を作られた。

(六) 五 点

1. 妙 剣

猛子の「浩然の気」これを「正」の一字に置いている。正しい。それから現われた千差万別のところを「偏」、偏するという字。この二つを組合せて「五点」を作っている。「正しい」ということは平等、「偏」は差別、「平等」と「差別」を組合せて作ってある。最初は「平等」をやる。つまり「妙剣」を学ぶ、「妙」の一字、注釈には「妙」とは「空」なりとあります。剣道では、これを昔は「打ち込み三年」と云って、切り返し、懸り稽古をやる。鉄舟翁は「この道を修せんと欲せば、初心の者、予が門に入り、勇悍不退の志を励まし、苦修鍛錬する時は三年にして流義の体を備えん」と、誰でもある年輩になると「浩然の気」というもの

に迷いの雲が懸るから、その雲を取るために「切り返し」「懸り稽古」をやる。もう雑念の入る間が無くなるから、自然に自分の持っているものが光を出す。鉄舟居士は「打ち込み三年間」そうすると中段の構が出来ると申しております。それで一生懸命やって、出来上がったところのものはどうなるのかというと、何も無いところから、相手に触れれば真直ぐ飛び込んで打つ。この技の一本。受けることなく、斬らせても突き破って勝て。もう気迫の極意のところは打ち込み三年で達してしまう。それを歌で「身を捨てて、又身を掬う、貝杓子」身を捨てるから、今度は大きな「構」が出来上る。

俺が俺がというものを打倒する。それを「空」と云い、「妙」とは空なり。仏法の「妙」に同じ。空という言葉にとらわれて何にも無いと思われませんが、頭为天辺から足の爪先まで充実しているところを「妙剣」とも、俺が俺を打切ったところをいう。

聞き慣れた一例として、“昔、下級武士が夜中に歩いていたら、辻斬りに出会って真剣勝負を申込まれた。「宜しい、拙者も武士の端くれだから真剣勝負に応ずるが、一寸主君の用があるから待っていて呉れ」と言って、小玉ヶ池の千葉周作先生の所へ行った。「実はこういう訳で真剣勝負を申込まれましたが、自分は剣術は知らない。殺されることは覚悟しているが、後で人が見てあの殺され方は立派である。流石武士だと言われる死に方をしたいから、是非教えて頂き度い」と願った。すると千葉周作先生は「君は面白いことを言うな。今まで勝ち方を聞きに来た者はおるが、死に方を聞きに来たのは君が初めてだ。それでは教えてやる。先ず辻斬りの前へ行ったら足を横に開いて、それで刀を抜いて大上段に構えて目を閉じている。そのうちにヒヤッとするから、その時は一緒に振り下して見ろ、お前は斬られているよ。然し、辻斬りも傷ついているよ。で後で人が見て立派な死に方だと言う。」武士は真剣だから教わった通りにやったら、いつまで経ってもヒヤッとしない。おかしいから、目を少しずつ開けて見たら、前で頭を下げている。「どうしたのか」と聞くと、「どうしたもない。今まで辻斬りをして斬り損ったことはなかったけれど、貴殿のような名人に会ったのは初めてである。大先生のお名前を教えてください。」と、武士は正直に「いや先程、千葉先生の所へ行って聞いてきた通りにやったんだ。」と言うと辻斬りは「聞いて来たとしても人間が一番惜しいところの命を出すという、死に腹を決めるところは大先生である。自分よりも先輩であるから、これから千葉先生のところへ行って、兄弟の杯をして来よう。」と、このような話がある。これが「妙剣」のところでは絶対絶命。ここで大事なことは目を開けて「驚・懼・疑・惑」を無くす修行が大切なところで、相手に竹刀で何かされると打たれやしないかとピクッとしたり、心に迷いの雲が懸る。目を開けていても雑念が起きない。必殺三昧、ここが「妙剣」のところですよ。よく、試合に臨むにあたって勝敗にとらわれるなという。そうではなく「勝」の一字になってしまえばよいので、余計なものがくっつくからいけない。「勝」の一字になりきった時に「勝」は無くなる。

「空」ということは充実していること。いっぱい入っていることであると教えている。

2. 絶妙剣

剣道には、十人十色の相手がある。近間の者もあれば遠間を得意とする者もある。色々の技を持っている。その色々のものを持っている人に合わなくてはならない。それで「絶妙剣」とは「妙剣」の「空」の土台の上に技がつく。これが「絶妙剣」。今の剣道はどちらかという「絶妙剣」から入る、試合稽古から入るから土台がない。初めのうちは伸びるが、後で止まってしまう。で「絶妙剣」は何をやるかと申しますと、技の変化をやる。小さく来たら大きく、大きく来たら小さく、技が切れない。近間の技、遠間の技をやっていく。これが「絶妙剣」。

この時に大事なのは「気」の切れないところを修行する。つまり「稽古力」をつける。それがこなれてきて「妙剣」と「絶妙剣」が一つになってしまう。「妙剣」というのは心。「絶妙剣」というのは「技」。「事理一致」して無理が無くなる。相手が出れば引く、引けば出る。で山岡鉄舟居士が「右を打てば左へつるぎ、つるぎ山。目をふさぐとも、あたらざりけり。」と云っています。「絶妙剣」の後期は、意識を使はないところまで行ってしまう。それを書いてあるのが「猫の妙術」の最後の眠り猫なのです。一番楽な状態で一番働ける状態。「事理一致」の練り上がったところです。

二年間全勝の往年の名横綱、双葉山が安岡正篤先生に、その猫の妙術、木鶏の話聞いて心掛けた。相手が一回で立てば一回で立つ、相手が五回で立てば五回、十回仕切れれば十回、何時でも応じて立つ、そういう相撲でした。その元は何かというと、「猫の妙術」の木鶏、木で造った猫、眠っている猫、これを心掛けたのです。安芸の海に七十勝目に破れ、それで安岡正篤先生に「我、未だ木鶏に到らず」と、電報を打っています。それは技だけでなく、それに加えて「理合」がある。修行して心掛ければ、丁度渋柿が何時とはなしに、甘柿に変わるように次第に熟してくるものである。

3. 独妙剣

「妙剣」「絶妙剣」のあとに「真剣」「金翅鳥王剣」「独妙剣」の三つがありますが、その根底は三つとも指導法を教えている。指導法を三つの段階に分けて「真剣」「金翅鳥王剣」「独妙剣」。鉄舟居士は「金翅鳥王剣」に徹底して、ここから「無刀流」が生まれた。金翅鳥王というのは、よく仏典の上で比喻に使われる途方もなく大きな鳥で、常に生きた龍を喰べている。その金翅鳥王が、龍を浦える時には、大きな両翼を拡げて、大海の上空を飛戈する。その翼が日光を遮って海上が暗くなる。龍が不審に思って海底から水面に近づく。金翅鳥王は卒然舞い下って羽ばたきする。海水がはねのけられて龍が顔を出す。金翅鳥王はこれを引攔んで空高く舞い上がる。このような雄大な幻想が組太刀に仕組まれ金翅鳥王剣となる。

鉄舟翁が、天龍、滴水禅師の許で「両刃、鋒を交えて避くることを須いず、好手還って火裏

の蓮に同じ、宛然として自ら衝天の気あり」という五位兼中至の頌を工夫すること三年にして解決した。自分には相手がある。その相手と本当に有りながら相手と一つということ体を得た。相手が初段であるなら初段と一つ、相手が五段なら五段と一つ、相手が子供なら子供と一つ、一つになってしまうところを悟った。

千葉周作先生のお話、九州で風格の立派な祭文語りがいた。友人曰く「君は堂々たるものだから祭文語りなんか惜しい。それで武者修行したらどうだ、待遇されていいぞ」と、祭文語り答えて曰く「俺は剣道なんぞ知らない」と言う。「教えてやるからその通りやれ、最初行って“武者修行に参りました”先生に是非、”お願い致します”と言え。他の人とやるとボロが出るからやるな」と教えた。そうすると「まあ先生やって呉れるから、ちゃんと構えて、技は一本も出しては駄目だぞ。そして相手にどこか軽く打たれたら“参りました”とお辞儀をしてしまうのだ。それでいいから……」。

その手で、どこへ行っても「参った」。それでズット江戸まで来て千葉周作先生の門を叩いて「お願い致します」とやった。すると玄関の所で「冗談をいうな、この道場で最初から先生にやる者なんかいない」「いや、私はその流儀なんです……」。英名録を見るとどこへ行っても大先生とやっている。仕方なく千葉先生に取次いだ。「そうか、それではやろう」と。それで千葉周作先生、構えてみたら寸分の隙がない。攻めたって乗ってこない。千葉先生も腹の中少し動いて来た。物凄いのがいると思った。仕様がなくて当り技を軽くやって見た。そうすると相手は「参りました」。千葉周作先生「いや、今のは一本にもなりませんから」と、祭文語り「いや参りました」と、どうしてもやらない。仕方なく後で部屋へ案内して「あなたは何処で修行したか存せぬが、あなたのような名人に会ったのは生まれて初めてだ。どうか、その修行を聞かせて呉れ」祭文語りも、千葉周作先生の前で本当の事を言って仕舞うのです。「実は私は剣術は知らないのです。友人に言われて、このようにして廻って来ました」と、そうすると千葉周作先生がまたビックリする。「昔から話には聞いていたけれど、剣道は全然知らない者、初心者と名人とは全く似ていることを。実際に会ったのは今日が初めてだ、有難かった」と非常に待遇されてその人は帰ったという話です。つくり話だと思いますが、ここが大事なところで、ここは最後の「独妙剣」、ここを沢庵禅師は「不動智神妙録」で書いている。「ずうっと高きは、ずうっと低きと同じものになり申し候」。ずうっと高い名人というものは、初心者と同じ。少しでも強そうに見えるのはもう駄目なのです。悟了同未悟。ずうっと高きは、ずうっと低きと同じものになり候。これが最後の「独妙剣」なんです。自分に雲さえ懸けなければ、誰でも生れながら具えているのです。ただここで大事なことは、この祭文語りは全然剣道知らない。知らないという心境は名人に似ているのですが、本当の名人というものはもう剣の極意を知り尽して、一切合切知っておって忘れてる。内容が違う。見たところは、同じ

ような貧弱な格好をしているけれども、中味は違う。これを絶学無為の閑道人ともいう。絶学とは、学ぶことは学び尽してもう学ぶところがない。為すべきことは為し果てて早や為すべきことはない。という大閑のあいた境涯の人であります。何でも知っておって、知らん顔をしている。これが「独妙剣」です。心の問題は、最初の「妙剣」「絶妙剣」で、個人をしっかりと鍛える。それから自分だけいいだけではなく、回りをよくしていく。良くするには、ああでもない、こうでもない、人に教える態度ではなく相手と一つになって仕舞う。簡単に言えば親心、これが後の三つ「真剣」。「金翅鳥王剣」。「独妙剣」であります。

(七) 山岡鉄舟翁の至誠

拾遺 (原文)

世間では居士が、明治天皇の相撲の御相手を奉仕して、^{かしこ}畏くも陛下を^な擲げ奉ったように言伝へて居るが、ソハ全く^{ごびょう}誤謬で、今其の事実を語れば斯うである。陛下まだ御若年に渡らせらるる時、或る日の御晩餐に居士と某侍従(確か片岡侍従と覚ゆ)とが奉仕して居た。スルト陛下盃を御手にし給いつつ、某侍従に向はせられ、吾が日本もこれからは法律で治めなければいかぬ。と宣まうたが、某は唯だ畏みて居ると陛下爾は如何思う、意見を^の陳べよ。と宣まう。ソコテ某恐れ乍ら国家を治むるの大本は、道德に在るか^{など}と存じ奉る。と奉答する。陛下は、イヤそれは昔の事だ。今の世には^{など}道德杯は何にもならぬ。と宣まう。某又之に^{など}応じて奉つる。という次第で、自然に一場の議論となった。陛下は議論に御興を添えさせられ、頻りに御盃を重ねさせ給ひしが、フト居士を顧みさせられ、山岡の意見は如何だ 朕に賛成か不賛成か。と宣まうた。居士は先刻より黙然として謹聴して居られたが、ここに初めて口を開き、恐れ乍ら小臣は日本を法律のみで治め候はば、人民は皇太神宮を拜まぬように相成べしと存じ奉る。と奉答せられた。これには、陛下グッと行詰らせ給ひしが、見る見るうちに^{げきりん おんけしき}逆鱗の御気色に渡らせられ、それより更に大盃にて幾盃かを重ね給ひ、ヤガテ、山岡相撲一番来い。と宣まいて。ソト立御あらせられ、山岡立てい立^{ひたすら}てい。と厳しく逼らせ給ひしも。居士ソハ恐れ入り奉る儀に候。とて只管平身低頭せられたので、陛下サラバ坐り相撲を取らん。とて百方手段を尽し居士を倒さんと^{もが}藻掻かせ給うたが、居士の体は恰かも盤石の如くビクともせぬので、陛下愈々益々逆鱗あらせられ、竟に御拳を固め、居士の眼を^つ衝かんと勢込んで飛び掛らせられた。ソコで居士^{よんどころ}抛所無く頭を一寸横へ交わされた。其機に陛下は居士の体を掠めさせられ、ドッと彼方へ^{なげ}打倒れ給ひ。ウーン一天万乗の君を擲るとは無礼至極な奴だ。と宣まはせられた。此の時畏くも、陛下は御微傷を負はせられたので、他の侍従等恐懼して寝殿へ入御を請ひ奉り、侍医をして応急の御手当を奉進せしめる。其間に居士は御次の間へ引退り肅然として控えて居られた。所が其侍従、居士に早速謝罪するがよい。と勧告する。居士頭を振って、イヤ小臣に謝罪する筋は御座らぬ。と云はれる。某、併し陛下が君を倒さうと

遊ばされた時、君が倒れなかったのは善くないであらう。といふ。居士ソハ以ての外の事なり。若し小臣が倒れたならば、恐れ多くも、正しく陛下と相撲い奉ったことになる。元来君臣が相撲という事は此の上無き不倫な事である。されば小臣は如何にしても倒れる事は出来ぬ。此の場合、若し故意に倒れる者があつたならば、ソハ^{みだり}明に君意に迎合する^{ねいじん}佞人といはねばならぬ（当時宮臣其他陛下と相撲い奉る者は皆偽って負るを例とせしを居士苦々しく思つて居られたのである）^{なほ}尚又^{またそつか}足下、或は、予が頭を交はしたのを悪いといはるゝかも知れぬが予の一身は固より陛下に捧げまつりてあるのだから負傷杯は聊か厭はぬが、若し陛下が御酔興の上拳固を以て臣下の眼玉を砕かせられたとすれば、陛下は天下後世の者に、古今希有の暴君と呼ばれさせ給はねばならぬ。而して陛下は御酒の醒めさせられた後に於て、幾何程御後悔遊ばざるゝことか知れぬと拝察する。されば陛下が御負傷あらせられたことは千万恐れ多いが、誠に^や己むを得ぬ次第と存ずる。仍て小臣の此の微衷を陛下へ奉上し奉り陛下が若し小臣の措置を悪いと仰せられたならば、小臣は謹んで此の座で自尽して謝罪する覚悟で御座る。と云つて決然たる様子である所へ一侍従が来て、陛下は最早御睡眠に入らせられたから、兎に角一往退出するがよからん。という。居士イヤ聖断を仰ぐまでは決して退出致さぬ。といはれ、侍従諸民大に持余し、^{ひそか}窃に此の由を侍従長へ注進する。侍従長急遽入来り百方諭告したが、居士頑として応ぜられぬ。其の内に、陛下御目覚あらせられ、侍従を召して山岡は如何せしやと御尋遊ばされ。侍従、居士の申条を具に奏上に及べば、陛下直に御起床遊ばされ、暫時黙然として在らせられたが、^{やが}頓て、朕が悪かつたと山岡に申伝へよ。と仰出された。侍従聖旨を居士に伝える。居士、聖旨誠に畏みまつれど唯だ悪かつたとの仰せのみにては小臣此の座を立兼ねます。何卒御実効を御示し為し下され度く願ひ奉ると奏上せられる。陛下之を聞き召され。復た暫時黙然として在らせられたが、^{つい}竟に向後相撲と酒とを停める。と仰出されたので、居士感激落涙して、聖旨の程確かに拝承し奉る。と奉上して退出せられた時は、最早白々と夜の明け方であつた。それより居士自邸に^{ちつきよ}蟄居して一向出仕せられぬ。陛下侍従を差遣はされ何故出仕せぬぞと御下問あり。居士謹慎の旨を奉答せられる。陛下ソレニ及ばぬ即日出仕せよ。と^{ごじょう}御諭ありしが、居士其儘一ヶ月を経過し、一日突然出仕御前へ伺候し、葡萄酒一打を献上せられた。ソコで陛下竜顔殊に麗はしく、モウ飲んでよいかと宣まひ、居士の面前にて之を召上らせられたと。

ま と め

山岡鉄舟先生の剣理は、剣法口訳書に曰く「撃剣の方術は事理の二つを錬磨するに在り。事は技なり。理は心なり。而して錬磨功つむときは、事理一致の妙處に至る。猶又錬磨究尽して、事理共に相忘する時、一劍倚天寒し。如是妙術の奥義を得るには、自ら錬り自鍛ひ、刻苦工夫心身を打失して年月を経る時、自然に其の甚深の妙理に到着す。譬ば水を呑んで冷暖自知するが如し。是れ之を以心伝心無刀流の剣術と云也」と。

山岡鉄舟先生は剣理を、理・事・理事一致・理事相忘の四段階に分けております。

(1) 理の修行

理は心なりと申しております。心とは自己の換え名であり、この自己は個々を主張する彼我对立の我ではなく、絶対の我であり、この絶対の我のことを「理」と言っています。正しい剣道、人間形成のための剣道修行に於ては、この「理」を把握する為は無刀流では剣法三角矩の本体の教へと、その修行方法があります。それは三年間打ち込み稽古三昧になりきり、機熟し大死一番絶後に再蘇する以外に術は無く、この悟りが得られねば巧妙な技も砂上樓閣であります。修行期間の長短ではありません。

古歌に

「身を捨てて又身を救ふ具杓子」

(2) 事の修行

先生は事は技也と申しております。先づ三年間の修行によって三角矩の本体を悟ったのでありますが、そこで悟後の修行として千差万別の技の修行が必要になります。技の修行では竹刀稽古と、その根幹を為すところの古流の形とを併せて行ふ事が肝要で古流形の中には流祖が真剣勝負で体得した宝珠が秘められております。技の段階は悟りは易く相続は難しと申す所です。

(3) 事理一致の修行

剣道人の中に、剣道は理であると、心のみをして技を軽視する人、又技のみを主張して心を軽視する人がありますが、心と技とは別々に独立したものではなく、不二、一如であります。この関係を明らかにして功積む時は、事理一致の妙處に到達できるのであります。ここは死に合っても平常心を失なわないとか、技神に入るとか、遊戯三昧などと申す妙境です。ここまで至れば、日々是好日、晴れてよし曇りてもよしで、自分一箇の人間は剣道で形成されたと申しても過言ではございません。然しながら社会は自分だけではない。他がある。他と円融無礙にゆくには、更に進んで事理相忘とゆう奥義に進まねばなりません。

(4) 事理相忘

事理相忘とは、今まで命懸けで修行して得た妙處を忘れてしまふという事です。之は容易な

らざる剣道修行上の一大難関門です。事理相忘とは、事理共に忘れる事であります。忘れるとは、何も学びもせず、何の修行もせず、何も出来ない阿呆の事でなく、事も理も究き尽して、今更究むべきも無し、という悟了同未悟の境涯を忘れると申すのであります。又、絶学無為の閑道人とも申します。何んでも知っていて知らん顔をしている。それで自然に化する。之が人間社会形成の真髓であり、剣と禅とを尽した山岡鉄舟先生は、この事理相忘の境涯に到達された真人であります。

参 考 文 献

1. 人間禅 …………… 1983.8.1 発行123号
 剣と禅（その1） 小川 忠太郎
2. 剣道の理念とその真髓
 剣道新聞 …………… 1981.3.25 より掲載
 講 話 小川 忠太郎
3. 剣と禅 …………… 1973.11.30 発行
 著 者 大森 曹 玄
4. 続 武道之研究………… 第壹輯 日本武道修錬会発行
 禅剣話 小川 忠太郎
5. 禅の友 …………… 1984.7.1 発行
 香巖智閑禅師（文）峰 京 子
6. 鉄舟居士の真面目…… 大正.7.6.16 発行
 編集者 圓 山 牧 田